

中国におけるコナン・ドイル(5)

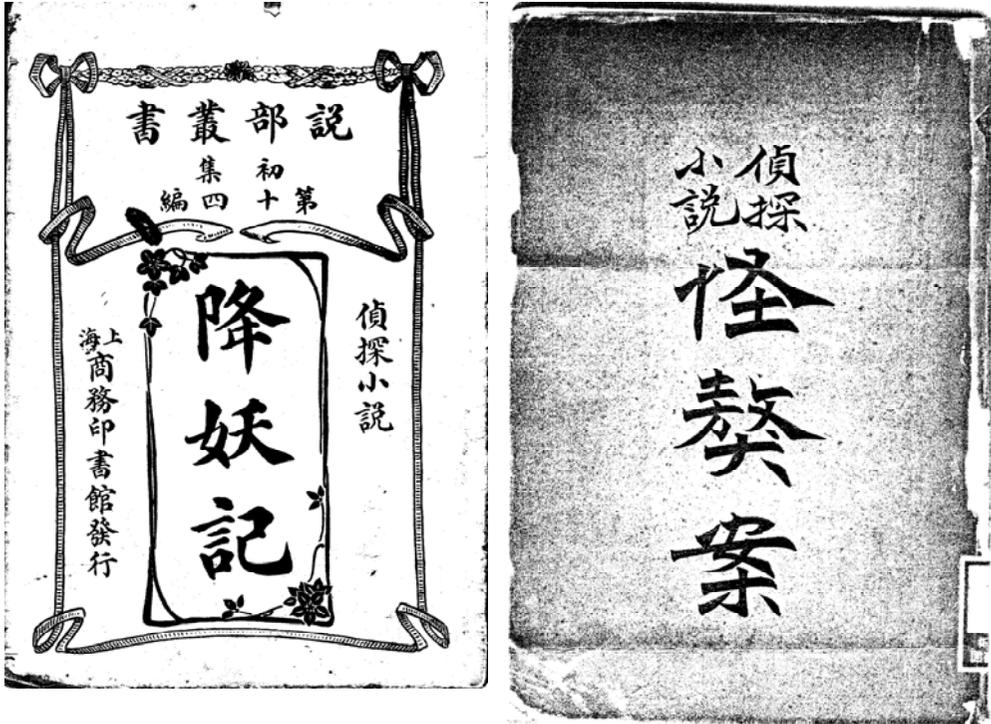
樽本照雄

11 『妖犬退治記(降妖記)』ほか 『バスカヴィル家の犬』

146 The Hound of the Baskervilles | The Strand Magazine 1901.8-1902.4

『バスカヴィル家の犬』の漢訳題名を示して「ほか」としたのは、理由がある。当時の漢訳は、1種類だけではないからだ。主要なものをあげれば、以下のようになる。(*印は未見)

- 1 *降妖記 (偵探小説) 屠哀爾士著 陸康華、黄大鈞訳
中国商務印書館1905.2/7再版/1907.3三版 説部叢書二=4
- 2 降妖記 (偵探小説) 著者名不記 陸康華、黄大鈞編訳
上海商務印書館 乙巳2(1905)/1913.12 説部叢書1=14
- 3 *降妖記 (道爾著) 陸康華、黄大鈞訳述
上海商務印書館1914.6 小本小説
- 4 怪癸案 (偵探小説) 韓璫^{ママ}Conon Doyle 人鏡学社編訳処訳*59
人鏡学社 光緒三十一年八月二十二日(1905.9.20)
- 5 癸崇(第三十九案) (英)柯南道爾著 陳霆銳訳*60
『福爾摩斯偵探案全集』第10冊 上海・中華書局1916.5/8再版/1921.9九
版/1936.3二十版*61
のち、『中国近代文学大系』11集27巻翻訳文学集二(上海書店1991.4)に収
録。



あわせて5種類があるわけではない。見てのとおり123は同じ翻訳だ。翻訳者別にすれば、3種類ということになる。

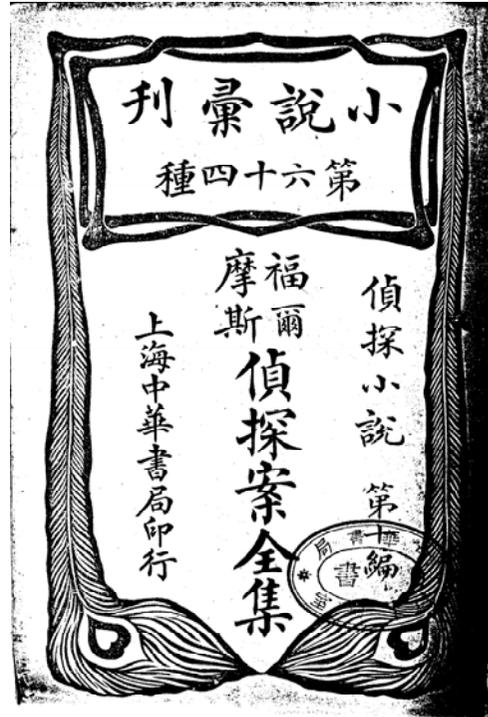
『降妖記』と『怪葵案』(章分けしていない)が、清末の、偶然にも同じ1905年の刊行である。『葵崇』は、それよりも約11年後の中華民国になってからの出版物だ。

11-1 書名のあれこれ

原文は hound となっている。日本語にすれば、たんなる「犬」である。獵犬だ。書名と関係するから、この犬について先に説明しておこう。

第2章で明らかにされるのが、バスカヴィル家に伝わる魔犬の話だ。その家の祖先を噛み殺した怪物の姿は、次のように描写される。

there stood a foul thing, a great, black beast, shaped like a hound, yet larger than any hound that ever mortal eye has rested upon. (おぞましい怪物であった。大きく黒いこの獣は、姿は獵犬に似てはいるが、かつて人の目に触れたこともない巨大な化け物であった) 28頁



獵犬 hound に似てはいるが、それよりもはるかに巨大である。だからこそ化物、魔犬、妖犬という。

それぞれの漢訳が、この部分をどのように処理しているのか見てみよう。

【降妖記】一獸狀如獵犬。(獵犬に似た獸であった) 9頁

あっさり漢訳しているから、原文の凄味が伝わってこない。漢訳書名との関係からいえば、「妖狗」あるいは「妖犬」を使用して詳しく説明してもいい箇所なのだ。

【怪癡案】且有一龐然黒獸。形類烈癡。(巨大な黒い獸があり、姿は猛々しい獵犬に似ていた) 10頁

こちらの方が、英文原作に忠実な漢訳であるといえる。「癡(獵犬)」を使用して漢訳書名「怪癡(魔犬)」とうまくつながっていることがわかるだろう。

ところが、この獒に特定の種類を意味させた漢訳がある。のちに発行された『獒崇』だ。

英文原作には、マスティフ mastiff が3カ所でてくる。第1章に2回、第14章に1回。いうまでもなく大型の猛犬を指す。3種類の漢訳がそれぞれをどう訳したのかを紹介する。

	第1章		第14章	
【降妖記】	大種狗	大種狗	×	
【怪獒案】	×	×	×	(獒は獵犬、魔犬の意味で使用)
【獒崇】	巨獒	巨獒	×	

『獒崇』は、マスティフを漢訳して獒を当てた。当時の英漢字典に「Mastif, n. 獒, 大種狗」とのっている。これを参照したものか。字典に記述があるのだから、『降妖記』がマスティフを漢訳して大種狗とするのは、正しい。

これと同様に、『獒崇』が本文に出てくるマスティフを獒にしても不都合はない。だが、具合が悪いのは、それを書名に使用した点なのである。

原作『バスカヴィル家の犬』の書名にいう「犬」は、怪物、妖怪、妖犬、魔犬を指しており、種類を特定しているわけではない。くりかえせば、原作の hound は、もともと大型の獵犬を意味している。マスティフに限らない。そうだからこそ、『獒崇』が書名にマスティフを意味させた獒を使うのは、不適當だと思うのだ。

『怪獒案』の方は、獒を獵犬の意味でしか使っていない。獵犬は魔犬にもなる。ゆえに、それを書名に取り入れたのには、なんの矛盾もない。これと『獒崇』のばあいは区別する必要がある。

上と同じく、魔犬の姿を描写した箇所は、次のようになっている。

【獒崇】二屍間則有一獸。狀類猛厲之獵犬。(ふたつの死体の間には獸がいて、その姿は狂暴な獵犬に似ていた) 12頁

『獒崇』の漢訳者陳霆銳は、『降妖記』と同じ「獵犬」とした。これは、陳霆銳にしてみれば苦しまぎれの処置なのである。

書名との整合性が問題となる。くりかえすが、ここの「獵犬」が原作題名に使わ

れた hound なのだ。

ところが、『獒崇』は、マスティフに獒という単語を当ててしまった。獒を書名に使うと、魔犬の種類が限定されることになる。ドイルの原作では、魔犬すなわち怪物の正体は、ブラッドハウンドとマスティフの雑種だ。マスティフとは異なるものを書名にしたということだ。

陳霆銳が採用した漢語の使い方に従えば、書名は、『マスティフのたたり』という意味になる。具体的な名詞になってしまい原作の題名にそぐわない。もともとが妖犬なのだから、犬の種類は特定できないほうがよい。『獒崇』は、魔犬には「妖犬」という別の漢訳を与えている。これを書名に使う『妖犬崇』あるいは『妖崇』とでもすべきだった。いまごろ指摘したところで、手遅れだ。正すことはできない。

11-2 漢訳の比較対照

『降妖記（妖犬退治記）』あるいは『怪獒案（魔犬事件）』という漢訳題名をみるかぎり、原文のバスカヴィルがないにしても、事件の雰囲気伝えていいることができる。

『獒崇（マスティフのたたり）』は、原題からすこしズレる。しかし、題名で事件の真相を明らかにしている当時の漢訳に比較すれば、ましなほうだ。

商務印書館の『降妖記』を3種類もあげたのは、形をかえて出版されていることによる。どういう経緯なのか、それを知るのは、むつかしい。

つまり、最初からシリーズとは無関係に独立した翻訳として出したのか、それとも「説部叢書」の1冊として刊行したのか、よくわからない。商務印書館の「説部叢書」には、いつもまつわって存在している問題なのだ。

可能性を考えれば、以下のようなになる。

最初、「説部叢書」には関係なく単独で刊行された。のちに「説部叢書」第二集第4編に収録し、その後、改編して初集第14編と数えなおした。それとは別に「小本小説」シリーズの1冊に収録する。

最初の単独刊行は想像できるだけで、原物で確認したわけではない。阿英の「晚清小説目」には「説部叢書」を書かない1905年の版本があげてある（129頁）。注記のし忘れか、もともとそうではないのか、これだけでは判断できない。単独刊行はされず、いきなり叢書に組み込まれた可能性も無視できないだろう。

どのみち、商務印書館版の上記3種類は、いずれも漢訳者に陸康華、黄大鈞のふたりをあげている。翻訳の内容については異同はないと考える。

『降妖記』は、当時の読者によって大いに歓迎された。侗生の次のような言及があるから、それがわかる。

偵探小説最受歡迎，近年出版最多，不乏佳作，如《奪嫡奇冤》、《福爾摩斯偵探案》、《降妖記》等書，其最著者也。^{*62}

探偵小説の流行を指摘し、3作品を例にあげている。『奪嫡奇冤』は、ガボリオの『ルルージュ事件』が原作だ。『福爾摩斯偵探案』はホームズものの全体をいい、『降妖記』が本稿であつかう『バスカヴィル家の犬』である。

著名だという3作品のうち2件が、ドイツのホームズものなのだ。同一原作が3種類の漢訳で刊行されているという事実にくわえて、「説部叢書」といい、中華書局の『福爾摩斯偵探案全集』といい、その重版の記録を見れば、多くの読者を獲得していたことが理解できる。

ただし、侗生は、すぐれていると漠然というだけだ。どこがどのようにすぐれているのか、という説明をしない。『降妖記』の内容に踏み込んでの評価がなされていれば、当時の中国人読者が、ホームズもののどのあたりに興味を感じていたのかを理解する手掛かりになったはずだ。残念ではある。

第1章 シャーロック・ホームズ氏 MR.SHERLOCK HOLMES.

忘れ物のステッキ1本から、その持ち主を推理するところからはじまる。ホームズもののお定まりである。

冒頭部分を原作と漢訳で比較対照してみよう。

MR.SHERLOCK HOLMES, who was usually very late in the morning, save upon those not infrequent occasions when he was up all night, was seated at the breakfast table. I stood upon the hearth-rug and picked up the stick which our visitor had left behind him the night before. It was a fine, thick piece of wood, bulbous-headed, of the sort which is known as a "Penang lawyer." Just under the head was a broad silver band, nearly an inch across. "To James Mortimer,

M.R.C.S., from his friends of the C.C.H., ” was engraved upon it, with the date “ 1884. ” It was just such a stick as the old-fashioned family practitioner used to carry dignified, solid, and reassuring. (徹夜をすることもまれではないが、そういう場合を除けば、常日頃はひどく朝の遅いシャーロック・ホームズ氏が、すでに朝食の食卓についていた。わたしは、暖炉の前の敷物の上に立ち、昨夜、客が忘れていったステッキを手にとってみた。握りの部分がこぶ状になっている、木製の太くて立派なもので、「ペナン・ローヤー」と呼ばれている品である。握りのすぐ下には一インチ(約二・五センチ)ほどの幅で、幅広の銀の帯が巻かれていた。そこには「謹呈 ジェイムズ・モーティマー氏、M R C Sへ、C C H友人たちより」と彫られ、年号は「一八八四」となっていた。昔かたぎの家庭医がかつてよく持ち歩いていたような、品格があり、丈夫で、頼りになりそうなステッキであった) 11頁

ふだんは起きるのが遅いホームズであった。徹夜をすれば、そのまま眠らずに朝食をとることもある。

ステッキを説明してなんでもないような箇所に見える。

なんでもないと感じるとすれば、それは、資料がそろっている現在だからだ。「ペナン・ローヤー Penang lawyer」は、ヤシの木で作ったステッキで、ペナン島から輸入される。そうと説明されて、はじめて納得がいく。もし原文を示されて、翻訳しろといわれれば、資料もなしに正しく理解できるかどうか、私には自信がない。

C C Hについては、あとの推理の題材でもあるから、そのままにしておいてもいい。

M R C Sは、原作のどこにも説明がない。第6章に「王立外科医師会附属の博物館 the Museum of the College of Surgeons」が出てくる。だが、これと直接結びつくと、普通は思いつかないのではないか。原文を見てそのまま理解する一般読者は、それほど多いとは思えない。M R C Sが「王立外科医師会会員 Member of the Royal College of Surgeons」を意味していることを知るのは、注釈書があるからだ。

これらについて、翻訳ではどのように工夫しているだろうか。興味を感じる箇所である。

【降妖記】福爾摩斯有事恒徹夜不眠。故常遲起。一日福適早餐。余立炉旁毡上。持一木杖審視之。杖美而堅。首作円形。飾以銀圈。径近一寸。圈中嵌有一千八百八十四年C C H敬贈国家外科医院層母提耳先生等字。余審其形。似為老医士所携者。非常物也。(ホームズは用事があるとよく徹夜をして眠らなかったから、常に起きるのが遅かった。ある日、ホームズはちょうど朝食をとっていた。私は、暖炉の敷物のうえに立ち、ステッキを持って念入りに見ていた。ステッキは、美しくて堅く、かしらは円形になっていて銀の輪で飾ってある。1寸ほどの太さだ。輪の中には1884年C C Hが国家外科病院のジェイムズ・モーティマー氏へ謹んで贈るなどの字がはめ込んである。私とその形を調べれば、老医師の持物らしく、すばらしいステッキだった)1頁

ホームズは徹夜をすれば、朝まで起きている。寝ないのだから当然だ。それを、仕事で徹夜をするから起きるのが遅い、としたのは誤解であろう。

ペナン・ローヤーは、漢訳では省略してしまう。

すこしの誤解と省略をしている漢訳者が、M R C Sについては、「国家外科医院」と正解に近い訳語を与えていることに驚く。イギリスの医学事情には詳しい翻訳者のようだ。

【怪癡案】施楽庵 Sherlock Holmes 平居遅起。唯莅事必夙興且夜寐。一日施適蚕餐。余立鑪邊之氈上。拾視昨夜某客所遺之杖。木質堅美而首圓。状如庇能律師。及年老医生所持者。杖端嵌銀寸許。上鐫一八八四年。C.C.H.同人贈馬田牧 Mortimer 医生数字。(シャーロックは、起きるのがいつも遅かった。ただ、仕事があると朝早くに起きて夜は遅く寝る。ある日、シャーロックはちょうど食事をしていました。私は、暖炉のじゅうたんの上に立ち、昨夜、客の残していったステッキを拾って観察した。木は堅くて美しく、かしらは丸い。形は、ペナンの弁護士あるいは老医師が持つものだ。ステッキの端には1寸ばかりの銀が埋め込まれ、上には1884年、C C Hの友人がモーティマー医師へ贈るといふ数文字が刻んである)1頁

『降妖記』とほぼ同時に発行されたのが、この『怪癡案』である。それぞれ独自に漢訳を進めていたことになる。

固有名詞には、英文綴りを添えている。ホームズの漢訳は、普通、福爾摩斯として知られる。施楽庵をあてるのは、珍しいかもしれない。ちなみに、ワトソンは屈臣だ。これもあまり見かけない。

ペナン・ローヤーを「ペナンの弁護士（庇能律師）」と直訳した。原文にそう書いてあるのだから無理もないといえばそうだ。ただし、直訳して前後の意味がとあるかどうかは、別問題だろう。引用符が使用されていることに気づいてもよかった。特別な意味をもっているというしるしだからだ。前後の流れを考えず、直訳をせずしたのは、すこしひっかかる。

M R C Sは、翻訳者には意味不明だったらしい。省略した。

【癸崇】華生曰。福爾摩斯操心慮患人也。当有事時。恒終夜無寐。故有遲起之習。某日晨。福在膳室中。方用早餐。余立炉旁氈上。撥火自熱。反身忽見一精緻之木杖。乃昨晚之來客所遺者。杖美而堅。首端作圓形。其下圍以銀圈一。直径可及一寸許。圈之表面。鑄有「一千八百八十四年。C C H敬贈於国家外科医院乾姆史馬帖滿先生」字樣。細玩其形状。知此為老前輩物也。（ワトソンが話す。ホームズは用心深い人間だった。仕事があるとよく徹夜をしていたから、遅く起きる習慣だ。ある朝、ホームズは食堂にいて、ちょうど朝食をとっていた。私は暖炉のそばの敷物の上に立って、火をかきおこし暖まっていた。振り返って見れば精巧なステッキがある。昨晚の客が忘れたものだ。美しく堅い。かしらは円形になっていてその下は銀で囲ってある。直径は一寸ばかり。囲いの表面には、「1884年、C C Hが国家外科病院のジェイムズ・モーティマー氏へ謹んで贈る」と刻んである。その形をよく見れば、年輩者のものだと思われる）1頁

「華生曰」で始める例は、以前にはあった。しかし、民国になってからの出版物でこれを繰り返すのは、やや古い印象を与える。ホームズの性格を「用心深い」と述べる部分は、英文原作にはない。ペナン・ローヤーは省略している。

M R C Sは、『降妖記』と同じ漢訳「国家外科医院」をあてる。発行の時間差を考えれば、先行訳を参照した可能性がある。

ステッキの観察に夢中になっているワトソンにホームズが声をかける。ステッキから何が理解できるか、と問うのだ。背中を見せているホームズに、なぜ、ワトス

ンのやっていることがわかるのか。ホームズの答えは、まことに簡単だ。

“ I have, at least, a well-polished, silver-plated coffee-pot in front of me, ” said he. (「つまり、ぼくの目の前に、表面がよく磨かれている銀製のコーヒーポットがあるということかな」と、彼は言った) 12頁

ポットにワトスンの姿が映っている、などとは書かないところが、いい。説明しすぎるのは、ヤボである。

【降妖記】福曰否。案上銀杯。光亮射人。可以映後耳。(「いいや。テーブルの上に銀杯があってピカピカで後ろがうつるんだよ」とホームズはいう) 1頁

英文原作をそのまま漢訳すれば意味が通じないとでも考えたのか。原文に近いが、すこしばかり余計な説明をつけくわえた。

【怪癡案】施曰。非也。予覚一光影映余之咖啡銀鑊。(「いいや。コーヒーの銀鍋に姿がうつっているんだ」とシャーロックはいう) 1頁

言葉は少ないが、こちらも、読者に考える楽しみを与えない。

【癡崇】福曰。君不見予桌上適有一銀製之咖啡杯乎。光采四徹。予正可從此中窺見汝之動作。(「テーブルの上に銀製のコーヒーカップがあるのが見えないのかい。ピカピカで、君の動きが丸見えなんだ」とホームズはいう) 1-2頁

ポットとカップでは違う。「光采四徹」という表現は、『降妖記』の「光亮射人」を言い換えたものらしく思える。参照したらしい。こちらの漢訳も、説明のしすぎだといっていいだろう。

『癡崇』が『降妖記』を参考にしていると思われる箇所は、ほかにもある。

ワトソンは、CCHの意味は「何とかいう狩猟クラブのことで I should guess that to be the Something Hunt, 」(13頁)と推測する。『降妖記』では、「どこかの狩猟クラブが贈ったものに違いない(是必某獵会所贈者)」と漢訳して次に割注をつ

ける。「ワトスンが狩猟クラブだと断定したのは、狩猟クラブの英語はHではじまっており、それを縮めたのだ（華生断為獵会者因獵会英文首字為H字嵌者縮短之耳）」(1頁)。『癸崇』にも割注があって、「英語では狩猟クラブの最初の文字はHだからだ（因英文中獵会首字即H字也）」(2頁)と書く。両者は、よくにている。

ただし、参照したにしては『癸崇』に大きな違いがある箇所を見つけて不思議に思いもする。

CCは「チャリング・クロス病院 Charing Cross Hospital」だ、とホームズがワトスンの推測を正すばめんを見てみよう。

『降妖記』は、「そのCCという2文字は、チャリング・クロスという場所を簡略化したものだ（其CC二字。為茶林哥老斯地方所簡縮者）」(2頁)と正しく漢訳する。

しかし、『癸崇』の方は、「そのCCという2文字は、十字会の慈善病院だと推測することができる（其CC二字。則可推知其為十字会之慈善医院也）」(3頁)と地名をわざわざ別物に翻訳する。

考えるに、チャリング Charing をチャリティ Charity、すなわち慈善に誤解し、クロス Cross を十字に翻訳したのではないか。こういう間違いをしているところから、漢訳者のロンドンについての知識が不足していることを感じさせる。

『怪癡案』は、CCHを「チャリング・クロス病院（退齡医院）」と正確に把握している。後から発行された『癸崇』が誤るのは、いかがかと思う。

訪問してきたモーティマー医師を、ホームズは、ドクターと呼んだ。これに対してモーティマーの返答がある。さきほど見てきたM.R.C.Sと関係があるので触れておこう。

“Mister, sir, Mister - a humble M.R.C.S.”(「いえ、ドクターと呼ばれる資格はありません、ミスターと呼んでください。王立外科医師会の一員でしかありませんから」) 20頁

医学博士号を持っておらず、王立外科医師会の会員にすぎないと謙遜しているのだ。「ミスターと呼んでください」で十分であろうが、日本語訳は「資格はありません」などと言葉を加えて説明した。

【降妖記】余一卑陋国家外科医院之人。何敢当此尊称。(私は王立外科病院のものにすぎません。ドクターという尊称には値しないのです)5頁

漢訳者は、M R C Sを「王立外科病院」と考えているから、翻訳が微妙にズレている。病院勤務と医師会会員とは違うだろう。ただし、細かいところを除けば、ほぼ原文に忠実ということはできる。これで中国の読者は理解する。

【怪癘案】吾不過一留院副医生耳。(私は病院の住み込み副医師にすぎません)6頁

こちらの漢訳は、最初から「国立外科医師会会員」を省略している。だから、ここでもその名称がでてこない。あっさりしたものだ。

【癘案】不敢当。下走乃一国家外科院卑陋之医生。過蒙先生獎借。实令人慚愧至於無地。(恐れ入ります。私は王立外科病院のつまらぬ医師にすぎません。過分のお励ましをこうむり、お恥ずかしいかぎりです)6頁

原文にない加筆をしているのには理由がある。漢訳ではドクターという呼びかけをしていない。お名前を聞いております、知り合いになれてうれしいです、などと勝手に書き換えて翻訳するから、それとの辻褃合わせに上のような漢訳となる。

第1章を見た段階で、3種類の漢訳のなかでは『降妖記』と『怪癘案』が、原文に比較的忠実であるように感じる。

さて、モーティマー医師は、どんな怪事件をホームズとワトスンのもとに持ち込んだのか。

第2章 バスカヴィル家の呪い THE CURSE OF THE BASKERVILLES.

モーティマー医師が取り出したのは、バスカヴィル家にまつわる伝説を記した文書だった。彼は、3カ月前(『降妖記』は「三日^マ前」と誤植する)に死亡したチャーズル・バスカヴィルから預かった。

その内容とは、バスカヴィル家の領主だったヒューゴの狼藉とその報いを述べたものだ。ヒューゴが村娘をさらい屋敷に閉じこめた。娘は屋敷から逃亡する。

獵犬にあとを追わせたが、ヒューゴーは、かえって魔犬に噛み殺されたというのだ。

これが、さきに紹介した巨大な魔犬伝説である。バスカヴィル家の祖先を噛み殺した魔犬、という意味で書名になった。

漢訳は、こまかなところで英文原作と異なる。

たとえば、距離表示だ。娘が逃れて目指した自分の家までの距離 3 リーグ (約15キロメートル) とか途中の 1、2 マイル (約1.6-3.2キロメートル) がある。『降妖記』は、いずれも「里」とする。『怪燹案』は、リーグは無視してマイルのみを「里」に置き換える。『燹崇』は、『降妖記』と同じくともに「里」だ。かなりの短距離になってしまった。原文どおりに細かく区別して漢訳することは、中国の読者には不必要だと考えたのだろうか。

ヒューゴーの仲間13名が、あとから追いかける。彼らは、ヒューゴーの末路を目撃させるために必要な存在なのだ。

『降妖記』と『燹崇』は、なぜか30名にしている。『怪燹案』は、英文原作どおりに13名で正確だ。

文書の末尾には、つぎのような言葉がつづられていた。

[This from Hugo Baskerville to his sons Rodger and John, with instructions that they say nothing thereof to their sister Elizabeth.] ([この文章はヒューゴー・バスカヴィルから息子、ロジャーとジョンにあてたものである。姉妹のエリザベスにはこの事を一切漏らすことのないように]) 29頁

ここに見えるヒューゴーというのは、魔犬に噛み殺されたあのヒューゴーとは別人だ。死人が説明するわけがない。いうまでもなく、当然、同名の子孫だと想像できる。ところが、漢訳者たちは、そうは考えなかった。

【降妖記】此書為暁格後人所述。以遺其子烏魯齋及莊兒。各宜珍藏勿失。(この文書は、ヒューゴーの子孫が述べたものである。その息子ロジャーとジョンに残す。保存して失わないように) 10頁

死んだヒューゴーが残した文書というのでは、つじつまがあわない。だから、漢訳者は、子孫に書き換えた。エリザベスについては、無視だ。

【怪癡案】此書与吾二子榮嘉 Rodger 及遵。John 且戒勿以此事告汝妹阿麗。Elizabeth (この文書は、わが息子ロジャーとジョンに与える。このことを妹のエリザベスに話してはならない) 11頁

こちらも、ヒューゴーと同名の子孫とは考えない。だから、名前を省略してしまった。そのほかは、英文原作と同じ。

【癡崇】此書為囂俄後嗣所述。以遺其子羅傑及約翰。其世世珍藏勿失。(この文章は、ヒューゴーの子孫が述べたものである。その息子ロジャーとジョンに残す。代々保存して失わないように) 12頁

『癡崇』は、ここでも先行する『降妖記』とほぼ同文である。同名の子孫ということ想像しない。英文原作とは離れた漢訳にしてしまった。ヒューゴーを囂俄と漢訳するのは、よろしい。あのピクトル・ユゴーの漢訳名と同じだから、おもしろく思う。

モーティマー医師は、6月14日付新聞に報道されているチャールズ・バスカヴィル殺人事件を紹介する。

漢訳3種も、同じく6月14日とする。周知のように、初出の『ストランド・マガジン』では、5月14日になっていた。ドイルは、単行本化するにあたり、6月14日に書き換えたのだ(新聞記事のなかの日付も初出の5月4日から、単行本では6月4日に変更される)。この事実から、3種類の漢訳は、翻訳の際、雑誌連載ではなく単行本を底本にしたことがわかる。

モーティマー医師から新聞記事を読み聞かされたホームズは、事件を知らないわけではなかった。ただ、当時、パチカンのカメオ事件に関わっていたから、といいわけをする。『降妖記』と『癡崇』は、カメオ事件を省略して漢訳しない。『怪癡案』は、カメオ事件を宝石事件と表現している。

こういうこまかい部分を翻訳するかどうか、作品としての豊かさを維持しているか否かに関係する。本筋には無関係だから省略してしまう。これでは、ホームズものを楽しむ余地が減少することになるだろう。

死去したチャールズは、南アフリカで巨万の富を蓄えて、故郷のバスカヴィル館

に戻ってきていた。心臓が悪く、つきあう人間もわずかだった。そのなかのひとりが、博物学者のステイブルトン Mr. Stapleton, the naturalist だ。

ステイブルトンを、『降妖記』は、斯太白敦（12頁）と、『怪癡案』は、是侗（15頁）と、『癡崇』は、斯魄爾頓（16頁）と表記する。

モーティマー医師は、新聞記事以外のことをホームズに話す。チャールズは、一族に呪いがかけられていると信じていたのだった。

あるとき、モーティマー医師が屋敷を訪ねてみるとおかしなものを見かけた。

I whisked round and had just time to catch a glimpse of something which I took to be a large black calf passing at the head of the drive. (わたしも急いで振り返ってみますと、ちょうど、車寄せの道の入り口の所を、子牛ほどもある大きな黒い生き物が走り抜けていくのが、一瞬見えました) 36頁

子牛ほどの大きさの魔犬というわけだ。チャールズは、魔犬の存在を信じていたからこそ恐怖におののいた。

【降妖記】急回首。驟見一黒物。状如小牛。疾馳而過。(急いで振り返りますと、子牛ほどの黒いものが、走り抜けていくのが一瞬見えました) 13頁

車寄せは省略しているが、英文原作とほぼ同じであることがわかる。

【怪癡案】吾急四顧。瞥見一物。形類小馬。余趨視之。倏然而逝。(私は急いであたりを見回しますと、子馬に似たものがちらっと見えました。目で追いましたがたちまち見えなくなりました) 15頁

原文の子牛が、ここではなぜだか子馬に変わった。

【癡崇】急回首視之。則忽見一物。状如一黒色小牛。瞥眼而過。急往踪跡之。則倏焉已不知所往矣。(急いで振り返りますと、子牛ほどの黒いものがさっと過ぎていきました。急いであとを追いましたが、どこにいったのかわかりません) 17頁

『降妖記』と似ている部分がある。急いであとを追ったというのは、英文原作にあるのを前に移動して漢訳したのだ。

チャールズの死体からすこし離れたところに新しい足跡があった。

the footprints of a gigantic hound 巨大な犬の足跡だったのです。38頁

【降妖記】足跡異於常物。似為獵狗所遺物。(足跡は普通のものとは異なっていました。獵犬が残したもののようでした) 14頁

【怪癘案】乃巨癘之足跡也。(巨大な獵犬の足跡だったのです) 16頁

【癘崇】乃大種獵犬之足跡也。(巨大な獵犬の足跡だったのです) 18頁

バスカヴィル家の伝説が、はるか過去からよみがえり現実のものになった瞬間である。

第3章 問題 THE PROBLEM.

殺されたチャールズ・バスカヴィルは、3人兄弟の長男だった。

次男は若くしてなくなり、その息子がヘンリーだ。三男ロジャーは一族の鼻つまみ者だったが、1876年、中央アメリカで病死したという。だから、チャールズの遺産を相続するのは、残ったヘンリー(カナダ在住)ということになる。彼をめぐって、この物語が進行する。主人公だといっていい。

『降妖記』は、ロジャーの死亡を「一千七百八十六年」(17頁)と誤る。

『怪癘案』は、ロジャーは「未婚」(20頁)で死んだ、と書き加える。たしかに、第5章あるいは第15章の種明かしの場面でそのように書かれている(40、132頁。実は、結婚をされていて息子がいた、と続く)。それを前にもってきた。

ロジャーには息子がいたというのが、この物語の鍵となる。チャールズがつきあっていた少ない人のなかの、あの博物学者ステイブルトンその人である。ロジャーの息子であることを隠し偽名を使って身近にいたというわけ。それには、当然ながら理由がある。私がここまで書けば、すでに事件の犯人をのべたのと変わりはない。

ヘンリーは、カナダからイギリスに帰国する予定になっている。ヘンリーを伴って明日の10時にもういちどホームズの家をたずねるようモーティマー医師と約束をした。そのあと、ホームズは、ひとりで事件について深い思考をめぐらす時間を持

つ。それには、タバコが欠かせない。ブラッドレイの店 Bradley's の前を通ったら、一番強いシャグタバコ1ポンド a pound of the strongest shag tobacco を配達するようにワトスンに頼んだ。

『降妖記』は、ブラッドレイの店を翻訳して「巴老利煙肆」(19頁)と表記する。『怪癡案』は「某肆」(22頁)と言葉をにごす。『癡崇』の「白拉特菜煙舖」(25頁)は原文のままだ。

シャグタバコについては、3種類の漢訳はそれぞれ「濃厚煙絲」、「最辣煙絲」、「気味濃郁之煙草」とだけ書いてシャグがない。架空の店ブラッドレイだから、タバコ名も翻訳してもしなくてもよさそうに見えたのだろうか。そういつてしまっは、ホームズものを読む楽しみが多く失われてしまう。

ワトスンは、ホームズのじゃまをしないように終日クラブ club で時間をつぶした。クラブを漢訳するのはむづかしい。それに相当するものが、当時の中国に存在していたかどうか。だから、漢訳者によって訳語が異なる。『降妖記』は、なぜだか「遊場」と漢訳する。時間をつぶした、という内容からの想像だろう。『怪癡案』は「総会」だ。字典に「公所」などとあるから、これにもとづく連想か。『癡崇』がいちばん妥当なところで「倶楽部」である。

ワトスンが帰ってみると、火事かと思うくらいに煙があふれている。ホームズは、コーヒーとタバコに全身を浸しながらデヴォンシアの地図を手元において事件の詳細を検討していたのだった。

第4章 サー・ヘンリー・バスカヴィル SIR HENRY BASKERVILLE.

約束の時間通りにホームズの部屋を訪れたヘンリー・バスカヴィルとモーティマー医師だった。

ヘンリーが取り出したのは、チャリング・クロス局の消印がある「脅迫状」である。

チャリング・クロスといえば、第1章に出てきた。同じ漢訳にしているかどうか見てみよう。第1章 - 第4章の順である。

『降妖記』は、茶林哥老斯 - 查林哥老斯(22頁)とする。茶と查は同音だ。しかし、どちらかに統一した方が理解しやすい。

『怪癡案』は、遐齡 - 遐齡(26頁)でゆらいでいない。

奇妙なのは、『癡崇』だった。第1章で地名を意味のある言葉に翻訳していた。

十字会之慈善だ。それをここでは、却林亮洛史(30頁)と音訳に変更するのだ。漢訳の途中で考えが変化することもあるだろう。ならば、気のついたところで全体を点検して統一するのが普通のやりかたではなかろうか。そうはしていない。

脅迫状は、昨日の『タイムズ』紙から論説部分を切り張りして綴られていた。

翻訳がむつかしいのは、言葉そのものをあつかう箇所であるのはいうまでもない。脅迫状と論説からの語句をまとめて示す。

As you value your life or your reason keep away from the moor. (あなたの命と正気が大事ならあなたはムアからは遠ざかれ) 57頁
' You, ' your, ' your, ' life, ' reason, ' value, ' keep away, ' from the.'
(『あなたの』、『あなたは』、『命』、『正気』、『大事』、『なら』、『遠ざ』、『かれ』、『からは』) 59頁

『タイムズ』の論説から文字を拾ったということを通ずる字句を示して論証する。ムアはないので、そこは手書きだ。ただし、As については何の説明もない。組み合わせたのだろう。日本語訳は、英文にあわせて分かち書きにした。

【降妖記】保権利。増福命。必去此原野。(権利を保ち、福運を増したいのなら、この原野より去らなければならない) 23頁

保字、権字、利字、福字、必字、命字、増字、去此字(略) 24頁

ムアを「原野」と漢訳した。バスカヴィル家の伝説文書は、「曠野」だった。漢字の出し方も、脅迫状と一致するように工夫をする。たとえば、「去此」を分かたず一緒に掲げているのは、理由がある。新聞の文章がそうになっており、これも新聞を特定する根拠だとホームズが説明する。それを漢訳に反映したのだ。

【怪癡案】倘汝鄭重汝之性命。及汝之靈魂。勿至此曠野。As you value your life or your reason, keep away from the moor. (もしあなたの命とあなたの靈魂を大事にしたいのなら、この平原に来てはならない) 26頁

You, 汝 Your, 汝之 Your, 汝之 Life, 性命 | 生 Reason, 靈魂 | 推論 Value, 鄭重 | 価値 Keep away, 勿至 | 失去 From the, 助語辞(略) 28頁

英文原作では、論説の語句を使って脅迫状をつくっている。それをどのように漢訳するか。Life に性命と生の二重の意味を与えて解説してみせた。これこそが、漢訳者の工夫である。

英文原作の「ムアからは遠ざかれ」を「この平原に来てはならない」と書き換えた。『怪癸案』は、脅迫状にも、新聞記事にも英語の原文を引用している。人名なども英語を組み込んでいる。英語を理解する読者を想定しているかのようである。単語を掲げる箇所では、辞書のような表記のしかたをするのが珍しい。まるで、英語学習用教材のような雰囲気をかもしだす。

【癸崇】君如欲保全性命。増進樂利。則必去此原野。(もしあなたが生命を保全し、快樂と利益を増やしたいなら、この原野より去らなければならない) 31頁

保字。権字。利字。福字。必字。命字。増字。去字。此字。(略) 32頁

単語の示し方が、『降妖記』とほとんど同じであるのに気づく。ただし、その単語と脅迫状の字句が一致しておらず、奇妙なのだ。「権字」といいながら、それが本文に見えないという不手際である。さらに、「去此」とあるべき字句まで分割するミスを犯している。

チャリング・クロスにしても、この脅迫状にしても、『癸崇』は、ほかの2種類に比較して、すこし頼りない。

ホームズが、数ある新聞のなかの『タイムズ』だと特定した根拠は、活字の違いだと説明する。その時、引き合いに出したのが、三流(だと書いてある)夕刊紙の『リーズ・マーキュリー the Leeds Mercury』と『ウェスタン・モーニング・ニューズ the Western Morning News』の2紙である。

『降妖記』は、2紙を訳さない。『癸崇』も、それにならって訳さない。『怪癸案』は、片方は『西方早報』と漢訳し、残りは原語を添えて『礼土美』と音訳する(29頁)。『怪癸案』は、あくまでも原文に忠実に翻訳しようという姿勢だとわかる。

封筒に書かれた筆跡のインクが途切れている。ホームズは、ホテルの備品を使ったと推測した。脅迫状の差出人は、ホテルに宿泊しているということだ。

ホームズは、脅迫状のにおいをかいでもいる。ただし、ドイルは、そう書かない。

He was carefully examining the foolscap, upon which the words were pasted, holding it only an inch or two from his eyes. (ホームズは文字が貼りつけられているフールスキャップ紙を一、二インチ(約二~五センチ)くらいまで目に近づけてじっと観察した) 63頁

ワトスンが話し手であることを、ドイルはまことに有効に利用しているということが出来る。ワトスンには観察力がないから、ホームズの行動の意味、すなわち香りを確認したことが理解できなかった、となる。

『降妖記』は、この重要な箇所を漢訳していない(26頁)。これではワトスンよりも鈍感だといわれてもしかたがなかろう。『怪癡案』は、「更展斯櫛反覆審視。(その手紙をなんども観察した)」(30頁)と漢訳して手を抜いていないのがよろしい。『癡崇』といえば、「既又取該信細視移時。(またその手紙をとってこまかく観察してしばらくした後)」(34頁)と原文どおりなのだ。『降妖記』よりも進歩している。

原因があって結果に結びつく。第15章のタネ明かしで説明される。「目から数インチのところまで近づけると、ホワイト・ジャスミンの香水の香りがほのかににおった。I held it within a few inches of my eyes, and was conscious of a faint smell of the scent known as white jessamine」(282頁)という箇所と対応するのだ。

『降妖記』には次のようにある。「余熟察亨利所得匿名信。覺有香露味。(ヘンリーあての匿名の手紙をよく観察すると、香りがしたのだった)」(109頁)。第4章にあるべき伏線が省略されてしまったから、突然、そのように説明されても読者は納得しないだろう。

『怪癡案』は、もっとくわしい。「吾反覆察其匿名小札。聞牋中含馥郁之氣。察之。乃茉莉香水也。(匿名の手紙をくりかえし観察した。手紙には馥郁とした香りをおびており、それはジャスミンの香水なのだった)」(135頁)。これでこそ辻褄があう。

『癡崇』が、またチグハグなのだ。第4章の伏線部分を漢訳しており、『降妖記』よりも進歩しているとせつかくほめたにもかかわらず、結論部分でバツサリと省略してしまった。種明かしをしないから、解明されたことにならない。

以上、「脅迫状」として紹介した。匿名だし、なによりも新聞の文字を切り張り

している。あやしいに決まっている。文面が命令口調だということもあり、「脅迫状」に違いない。誰でもそう考える（ように書いてある）。これがドイルの巧妙なところだ。誤誘導といってもいい。脅迫状にしか見えないが、実は、そうではなかったことが最後に明らかになる。

ヘンリーが新しく購入したブーツの片方がなくなっていた。なんでもないかのようサラリと描写しているのが、うまい。

ヘンリーとモーティマー医師が部屋を出ていく。ホームズとワトスンがあとをつける。馬車に乗ってヘンリーを尾行している男を目撃する。しかし、その男を追いかけることには失敗した。

ホームズがうった次の手は、ホテルの調査だ。チャリング・クロスのホテルから、切り抜いた『タイムズ』をさがすようにメッセンジャー会社 the district messenger offices の少年に依頼した(72頁)。

メッセンジャー会社は、郵便局とは別物として作品のなかに登場している。当時、個人間の手紙、品物を配達していた。誤配した電報をさがしているといういいわけまで用意する。ゴミ箱をあさるには、それらしい理由が必要なのだ。郵便局員ではできないことをホームズは依頼した。だから、ここは郵便局では都合が悪い。英文原作は、考え抜いて組み立てられているというわけだ。

しかし、『降妖記』は、「郵局」と漢訳し郵便局に置き換えた(30頁)。中国の読者にはこの方が理解しやすいと配慮したものか。『怪案』も同じく「郵局」(35頁)とし、『癸崇』も同様である(39頁)。

中国の現実に存在しないものは、とりあえず音訳しておき訳注で処理するという方法がある。そうしたほうがよかった箇所だ。

第5章 切れた三本の糸 THREE BROKEN THREADS.

「切れた三本の糸」というのは、着手していた捜査がいずれもうまくいかなかったことをいう。

疑わしいと思われた執事には、アリバイがあった。脅迫状に使われた『タイムズ』をホテルにさがしたが、その存在を確認することはできなかった。あとをつけていた馬車の御者からは、手がかりが得られなかった。

第4章につづいて、ここでもヘンリーのブーツが紛失している。今度は、古いブーツなのだ。2度までも、しかも、古いというところに意味が込められている。

I only had three pairs in the world - the new brown, the old black, and the patent leathers, which I am wearing. (わたしが持っているブーツは全部で三足しかありません。新品の茶のブーツ、古い黒のもの、今はいているエナメル革のもの) 79頁

『降妖記』は、この部分を省略した。直前にホームズとヘンリーの会話がある。「あなたがなくしたのは新品の茶のブーツだと前にいいましたよね(子前云所失新購之履為棕色者乎)」とホームズがいう。ヘンリーは、「前になくしたのは茶色です。今またなくしたのは灰色のです(前所失者為棕色。今又失一。為灰色)」(32頁)と答える。これに加えて原文のように繰り返すのは、煩雑だと漢訳者は判断したのかもしれない。だが、漢訳者は、ブーツの古さと新しさに重要な意味があることに気づいていないのか、それを省略してしまった。持ち主のニオイがしみついているという重要な事実を見失ってしまう。原作の用意周到さに気づいていないことになる。

ドイルは、読者がニオイよりも色に注意するように書いている。しかし、漢訳者が読者と一緒になって騙されていてはしょうがないだろう。

【怪案】吾有靴三。一則櫻色生皮者。一則黒色熟皮者。昨日櫻色者已失其一。今日黒色者復失其一。(私はブーツを3足持っています。ひとつは茶色の新しいもの。もうひとつは黒色の古いものです。昨日は茶色のものをなくして、今日は黒色のを片方なくしました) 37頁

こちらは、英文原作を忠実に漢訳している。「生皮」と「熟皮」で新旧を区別して表現したのは、うまい。ただし、エナメルは省略した。

『案崇』は、『降妖記』と同じく直前の会話だけを訳出してブーツ3足部分は省略する。「今またブーツのひとつをなくしてしまいました。前は茶色で、こんどは黒色のが姿形もありません(今乃又失一履矣。前者所失為一棕色之履。今一黒色履。又不翼而飛矣)」(42頁)

『降妖記』と同じくこちらでも色にのみこだわったのは、やはり判断ミスだとしかいいようがない。注意深く原文を読んでいるはずの漢訳者でさえも、うっかりと見

過ごすくらいに、原作がすぐれていると考えるべきか。

第5章で読者が知るのは、ヘンリーが相続する遺産の総額である。

Sir Charles had the reputation of being rich, but we did not know how very rich he was until we came to examine his securities. The total value of the estate was close on to a million. (サー・チャールズは資産家として有名でしたが、残された有価証券を調べるまでは、わたしたちもこれほどの資産があるとは知りませんでした。遺産総額は百万ポンド(約二四〇億円)にも届こうというものでした) 83頁

securities は、複数形で有価証券、すなわち手形、小切手、株券、債券などを意味する。それを含まなければ74万ポンドだとも書いてある。

【降妖記】查斯之富。人盡知之。余始未識其富之程度。繼察其田地契券之價值。不下一百萬鎊。(チャールズに財産があることは、人はみな知っていました。しかし、私は、それがどの程度のものか知らなかったのです。のちにその土地所有権証書の価値を調べてみると、百万ポンドを下りませんでした) 34頁

英文原作の有価証券が理解できなかったか。あるいは、中国の読者には「田地契券」に置き換えたほうが理解しやすいとの判断かもしれない。

【怪案】葩史宮素称富裕。特查未死。吾輩不能知耳。吾今會計之。約有百餘万。(バスカヴィル家はもとより裕福で知られていました。特にチャールズが死去されるまえは、われわれはどれくらいのものか知ることはできなかったのです。このたび計算してみますと、おおよそ百万あまりでした) 40頁

衰退したバスカヴィル家を再興するためにチャールズは帰国したのだ。それなのに、この漢訳は、バスカヴィル家が裕福のままであるかのように解釈している。これでは、チャールズの役割がなくなってしまう。有価証券も省略している。百万あまりも原文とは異なる。

【癸崇】却爾司本以殷富著称鄉里。特其財産総数。究有幾何。人皆不能知之。直至於其易簣後。雇量其田地価値。始知乃不啻一百万鎊。(チャールズはもともと大金持ちで知られていました。その財産の総額がいくらか、人は知ることができなかつたくらいです。死去されたのち、その土地の価値を調べてはじめて百万ポンドをくだらないと知つたのでした) 45頁

土地の価値を百万ポンドにしたところは、『降妖記』と似ている。こういう箇所があるから、『癸崇』は『降妖記』を参照しているのだらうと推測するのだ。

とはいいいながら、『癸崇』がすべて『降妖記』をまねているというわけでもない。

ヘンリーがバスカヴィル家に向かうのにワトスンが同行することになる。土曜日、パディントン駅発10時半の列車で待ちあわせる。『降妖記』は、それをなぜだか10時に誤る(36頁)。『癸崇』は、正しく10時30分とする(48頁)。『怪癸案』は、時間を省略してしまう(42頁)。これでは待ち合わせすることができない。

ヘンリーたちのあとをつけていた馬車の御者に質問すると、依頼者は自らをシャーロック・ホームズと名乗ったというのだ。犯人は、ホームズの動きをすべて知つたうえで行動していることが判明した。ホームズに対する犯人からの挑戦なのである。

第6章 バスカヴィル館 BASKERVILLE HALL.

知識がなければ漢訳できない固有名詞の例に関連して「王立外科医師会附属の博物館 the Museum of the College of Surgeons」に触れた。モーティマー医師がロンドンで時間をすごした場所として第6章の会話のなかにでてくるものだ。

『降妖記』は、「城内医学校」(40頁)とする。博物館を省略した。前に、この漢訳者は医学事情に詳しいと書いたが、これではその言葉を訂正する必要がでてくる。『怪癸案』では、「外科医院之博物所」(48頁)となっている。正しい。『癸崇』は、「外科博物院」(53頁)だ。『降妖記』を参照したらしいのだが、ここは独立して正しい判断を下している。3種ともに、微妙に異なっているのがおもしろい。

『降妖記』と後の『癸崇』の漢訳が似ていることは、たびたび指摘している。一部、異なる箇所があるといっても、その印象は強い。話の本筋ではない部分で、共通しているように思う。

モーティマー医師は、専門の分野に引きつけて話をするのがクセだ。

A glance at our friend here reveals the rounded head of the Celt, which carries inside it the Celtic enthusiasm and power of attachment. Poor Sir Charles's head was of a very rare type, half Gaelic, half Ivernian in its characteristics. (こちらのご友人をごらん下さい。ケルト民族特有の丸い頭をされているのがおわかりでしょう。ここにはケルト人ならではの情熱と愛着がひそんでいるのです。お気の毒なサー・チャールズの頭の型は、純血ではなく、スコットランド・ゲール人の血が半分、アイルランド人の血が半分という非常にまれなものでした) 97頁

スコットランドのゲール人もアイルランドのイヴェルニア人もともにケルト人なのだそうだ。

【降妖記】省略 41頁

【怪癡案】子試觀謙之頭顱。圖如喜墟^{ママ} Lelt 之人。腦中必藏恋喜墟之性質。毋怪其恋故郷也。(ヘンリーの頭をごらん下さい。ケルト人のように丸いです。頭では必ずケルトをひそかに恋しくおもっているのです。故郷を恋するのを怪しむにはあたりません) 49頁

【癡崇】省略 54頁

『怪癡案』は、原文に忠実な漢訳をめざしているとわかる。『降妖記』と『癡崇』はともに民族についての説明を省略している。だから共通しているという。

舞台は、ロンドンからデヴォンシャのムアへ移る。バスカヴィル館がある場所だ。ムアへの途中で騎馬兵を見かける。プリンスタウン監獄からノッティング・ヒルの殺人鬼セルダンが脱獄したという。脱獄囚には、物語におけるしかるべき役割がふられているのはいうまでもない。

“ It is Selden, the Notting Hill murderer. ”(セルダンですよ、あのノッティング・ヒルの殺人鬼ですよ) 100頁

【降妖記】名司當。即於納工山戕人者。(セルダンという名前です。ノッティング山で人を殺したやつ) 42頁

地区名であるノッティング・ヒルを山にしてしまった。

【怪癡案】名余敦、即殺人於適亭山 Notting 中者。(セルダンという名前です。ノッティング山で人を殺したやつ) 51頁

『降妖記』と同じだ。

【癡崇】名司當。納丁山殺人之案。彼実主謀。(セルダンという名前です。ノッティング山の殺人事件は、やつが犯人です) 55-56頁

『降妖記』と基本的に同じで、さらに「やつが犯人です」をつけ加えた。漢訳3種ともに、ノッティング・ヒルが地区名であるという認識がない。バスカヴィル館は、死んだような雰囲気につつまれていた。そのうえ、その夜にはすすり泣く女の声が聞こえた。荒涼とした風景に存在する陰気な屋敷、おまけに怪しげな物音を加えて、ほとんど恐怖小説の様相をおびている。

第7章 メリピット荘のステイプルトン一家 THE STAPLETONS OF MERRIPIT HOUSE.

陰気な夜をすごした翌日、執事のバリモアの妻が泣きはらした眼をしている。泣き声の主である。怪しい人物としてバリモアを残しているのは、作者による誤誘導のひとつだ。

ワトソンは、附近を散歩することにした。途中で出会うのが捕虫網をもったステイプルトンである。彼は、底なし沼と新石器時代の遺跡があることをワトソン、すなわち読者に説明する。さらに、美人の妹が出現する。兄の姿が見えないところで、ワトソンにむかってロンドンに帰れという。ヘンリー・バスカヴィルと人違いしての発言だった。

以上が第7章の主な内容だ。細かく見ると、いくつかの興味深い箇所がある。

あたりに鳴り響いたうめくような声について、ステイプルトンが解説してワトソンにいう。

The peasants say it is the Hound of the Baskervilles calling for its prey. (小作人たちは、バスカヴィル家の魔犬が餌食を求めている声だと言います) 120頁

日本語訳では「魔犬」としているが、これが題名になっている「バスカヴィル家の犬」なのだ。

【降妖記】郷人伝説此為戕害巴斯赤衛利一族之獵犬。(田舎の者は、これがバスカヴィル一族を殺害した獵犬だと言っています) 49頁

英文原作の書名なのだから、漢訳者も漢訳題名を『巴斯赤衛利一族之獵犬』としてもよかった。しかし、結果として『降妖記』になったのは、短い書名のほうがなじみがあったのだろう。

【怪癘案】此間農人云。斯乃妖癘之声。恐不久又将出而祟人矣。(ここの農民は、魔犬の声だと言います。おそらく間もなくまた出てきて人に祟るんでしょう) 62頁

後半は、漢訳者がつけ加えた。「餌食を求めている calling for its prey」を変形させたということも可能だ。

【癘祟】據郷農言。此即戕害却爾司之妖犬。(農民のいうところによれば、これこそがチャールズを殺害した妖犬なのです) 66頁

バスカヴィルをチャールズに置き換えてしまった。最近の殺人事件は、チャールズが被害者だ。そう考えての変更だろう。だが、これでは、伝説の持つ重みがなくなる。祖先がくい殺され、その子孫も同じ運命にあったからこそ恐怖が増加する。書名と関係する箇所なのだから、もうすこし慎重に漢訳すべきだった。

ステイブルトンは、聞こえてきた鳴き声をサンカノゴイ (bittern 漢字で表示すれば山家五位)、すなわち絶滅寸前のサギの1種だと言ってみたりする。

英文原作には、有史以前の住居跡が存在していることを説明する箇所がある。しかし、『降妖記』と『癘祟』は、これを省略した。殺人事件とは、直接の関係はな

いという判断なのだろう。『怪癡案』は、原文のまま忠実に漢訳している。

第8章 ワトスン先生の第一報 FIRST REPORT OF DR. WATSON.

ワトスンからホームズへあてた報告の手紙である。「一ページ分だけ紛失してしまった。One page is missing」(133頁)と書いてあるが、紛失した部分があるとは思えない。

『降妖記』は、「私がホームズにあてた手紙の第1信はずでに失われてしまった(余所致福信首次已遺失)」(54頁)と誤る。『癡崇』も同様に、「私がホームズにあてた手紙の第1信はずでに失われて残っていない(余所致福爾摩斯之信。第一号已遺失無存)」(71頁)としている。『怪癡案』は、原文に忠実が翻訳方針だと思っで見れば、なぜだかこちらもおかしい。「散逸した残りで、わずかに二三があるとはいえ(雖散失之餘。僅存其兩)」となっている。おかしいといえば、『降妖記』と『癡崇』はともに、手紙の日付、10月13日 October 13th.を省略する。『怪癡案』は、手紙の後ろに移動している。

『降妖記』は、手紙だからという理由からか、原文の描写を大幅に削って大筋だけだ。

英文原作ではムアの風景をこまごまと説明したあと、ホームズはそのような事柄には無関心だった、とワトスンは書く。「太陽が地球の周りを回っていようが、地球が太陽の周りを回ろうが、君はまったく無関心だったことを、ぼくは今でもよく覚えている。I can still remember your complete indifference as to whether the sun moved round the earth or the earth round the sun.」(134頁)

ここを漢訳するのは、『怪癡案』だけだ。「太陽が地球の周りを回るのか、それとも地球が太陽の周りを回るのかと人が議論をしているのを聞いて、君は無関心だったことを覚えている。そのような意味のない話を君は聞きたくなかったのだ(且吾曾記君聞人議論日繞地球行。抑地球繞日行之説。君置而不辯。可知君必不願聽此無謂之談也)」(69頁)

ワトスンの手紙は、ホームズへいくつかの事柄を報告するものだ。

1. ムアに逃げている脱獄囚の動向
2. ヘンリーがステイブルトンの妹に好意を寄せていること、兄のステイブルトンは、それに嫉妬していること
3. ヒューゴの伝説の現場を見学したこと

4. ラフター荘のフランクリンに会ったこと

5. バリモアが夜中、ムアの暗闇を見つめているという怪しげな行動

『降妖記』と『癡案』は、まったく同じというわけではないが、大筋だけを漢訳した。『怪癡案』は、両者とは違い原文に忠実だ。

2のヘンリーとステイプルトン兄妹の箇所を英文原作と漢訳を比較してみる。

and yet I have more than once caught a look of the strongest disapprobation in his face when Sir Henry has been paying some attention to his sister. (サー・ヘンリーが妹にやさしい素振りを見せたりすると、彼の顔に強い不快な表情がうかぶのを、ぼくは何回も目にした) 137頁

ワトソンは、兄の不快な表情を、妹にたいする愛情だと解釈した。実は、兄妹愛ではなく夫婦愛なのだ。しかし、真相が明かされる以前のことから、ワトソンの書くように理解せざるをえない。そういう微妙な箇所だ。

【降妖記】乃其妹与亨利私語。或携手閑歩。其兄沮喪之色。即現於面。(妹がヘンリーと私語する、あるいは手に手をとって散歩すると、その兄は元気のなさが顔にあらわれるのだった) 55頁

「手に手をとって」は、翻訳のしすぎだ。そのような表現は原作にはない。

【癡案】吾嘗見謙勵与白梨語時。是偶每含慍色。(ヘンリーとベリルが話をするとき、ステイプルトンはきまって憤怒の色をうかべるのだった) 71頁

ほぼ原作に近い漢訳だといえよう。

【癡案】蓋余每睹亨利与其妹私語時。其兄往往露不豫之色。(ヘンリーがその妹と私語する時、兄は往々にして不快な色をうかべるのだった) 73頁

『癡案』は、『降妖記』を手本にしているらしい、と私は判断している。ところが、上の箇所は、そうならないから不思議だと思う。共通している部分が多い

が、異なっている箇所もあるということだ。

『降妖記』と『癡崇』が、同じ箇所に小さな間違いがあって、落ち着かない。

The other day - Thursday, to be more exact - Dr. Mortimer lunched with us.
(先日、正確にいうと、木曜日のことだが、モーティマー医師はぼくたちと昼食を共にした) 138頁

問題は、曜日なのだ。

【降妖記】礼拝二日。層母提耳来此小餐。(火曜日にモーティマーが来て食事をした) 55頁

原文の木曜日 Thursday が、火曜日になった。
参照しているらしいから『癡崇』を先に示す。

【癡崇】前星期二日。馬帖満医士曾在亨利家小餐。(このあいだの火曜日にモーティマーがヘンリーの家で食事をした) 73頁

『降妖記』とほぼ同じだとわかる。間違っている。

【怪癡案】木曜日馬田牧来訪。(木曜日にモーティマーが訪れた) 71頁

当時の英漢字典に「木曜日」と書かれている。食事がぬけているが、木曜日というのは正しい。

第8章で注目される箇所、すなわち後の物語の伏線が、ステイブルトン兄妹の関係である。ヘンリーが妹に好意を寄せると、兄が嫉妬をする。前述のように、作者は、ワトスンにそれを兄妹愛だと説明させている。読者に怪しまれないように工夫をした箇所である。

バリモアが夜中に屋敷内をうろつきまわる秘密は、次章で明らかになる。

第9章 ムアの明り THE LIGHT UPON THE MOOR.

ワトスンが、ホームズにあてて報告する10月15日付の第2信だ。

主要な内容は、ふたつある。

ひとつは、ヘンリーがステイブルトンの妹を好きになり、兄がそれに対して怒りをぶつけること。

ふたつは、夜中に徘徊するバリモアの不可解な行動が、脱獄囚に関係するものだという事。つまり、脱獄囚は、バリモアの妻の弟だった。ムアに潜んだ義理の弟に食事を準備したという合図を送っていたのである。それに関連して、脱獄囚をムアに追跡するばめんもある。

『降妖記』と『癡祟』は、ここでも日付を無視する。『怪癡案』は、「十月望日」と正確に漢訳している。

ステイブルトンが、ヘンリーと妹の結婚を反対する理由がわからない。そこでワトスンは、バスカヴィル家の魔犬伝説が原因ではないか、と考える。

I know nothing against him, unless it be this dark fate which runs in his family.

(ただひとつ、思いつくのは、彼の一族にまつわる、あの不吉な運命である)

154頁

「あの不吉な運命」といえば、魔犬伝説以外にはありえない。

『降妖記』は、この部分を省略した。それでは、『癡祟』はどうかと見れば、つぎのようになっている。

【癡祟】其或斯太白敦惑於亨利家妖狗作祟之説。故不願其妹与之締婚歟。(あるいは、ステイブルトンはヘンリーの一族が魔犬に祟られているという説に惑わされているため、妹が婚約するのを願っていないのかもしれない) 80頁

言葉を置き換え、さらに説明を増加させているが、ほぼ英文原作の意味に近い。

『降妖記』とは違っている。

『怪癡案』は、どうか。

【怪癡案】所嫌者。唯其家屢遭慘死耳。(疑うのは、その一族がたびたび惨劇にあっていることぐらいだ)

やはり、これが一番原文に近い。

ステイブルトンは、ヘンリーの妹にむけた愛情を利用しようとした。つまり、時間稼ぎをしておいて、殺害の機会をねらおうというわけだ。いっておかなければならないのは、ドイルは、あからさまにそう説明しているわけではない。あとから考えれば、そうとわかるように記述している。

if I would promise for three months to let the matter rest and to be content with cultivating the lady's friendship during that time without claiming her love. This I promised, and so the matter rests. (それで、わたしは三か月の間、この件はおあずけにして、結婚はあせらず、彼女と互いに理解を深めることにすると約束すれば、彼も強硬な反対はしないとおもいました。そこで、わたしはそう約束をした。と、まあ、こういうわけです) 155頁

ステイブルトンが提案したのではなく、ヘンリーの方から言い出した、というのが作者の巧妙なところなのだ。

【降妖記】但三月内。只許与其妹為尋常之交。毋得別生枝節。余遂諾之。(ただし、3ヵ月の間は、その妹とは普通のつきあいをしておいて、別に事故がおきないようにするというので、わたしはそれを承諾したのです) 62頁

【怪癡案】但望謙勵俟三月後始与訂婚。謙一一諾之。(ただし、ヘンリーには婚約するのは3ヵ月を待ってもらうことにして、彼はすべてを承諾したのです) 79頁

【癡崇】特求予於三月之内。不復与其妹談論及此。則将来終有作合之日。惟尋常往来。則儘可自由云云。(3ヵ月のあいだ、その妹との件はおあずけにすれば、将来はむすばれることもあろう。ただ、日常の往来は自由にするなどなど) 81頁

漢訳3者を並べてみると、それぞれがいずれも「3ヵ月」をはずしていない。そのなかで『降妖記』が、比較的原文に忠実だということがわかるだろう。

第9章においては、英文がイギリス版とアメリカ版では異なる箇所があるという。

ワトスンとヘンリーが、脱獄囚を追跡するばめんだ。

We were both fair runners and in good condition, (ぼくたちは、二人とも走るのが速く、コンディションもよかったのだが) 169頁

『ストランド・マガジン』では、上のようになっている。それが、アメリカ版では、こうなる。

We were both swift runners and in fairly good training, (こちらは二人とも足は早く、しかもコンディションも申し分なく上々だったのだが) 321頁

英語自体が、微妙な言葉使いなのだ。漢訳では、『降妖記』と『癸崇』は、両者ともこの部分を無視した。

ところが、『怪癸案』は、ちゃんと翻訳しているから感心する。

【怪癸案】吾与謙皆善走。且此時精神活潑。(私とヘンリーはふたりとも足は速く、しかも元気はつらつだったのだが) 85頁

結局のところ取り逃がした。月を背にする不思議な人物の影をワトスンは目撃する。英文原作は、謎がいつそう深まっていくという巧妙な筆運びである。

ワトスンの手紙の最後には次のような文章がある。初出の『ストランド・マガジン』には存在しない表現だ。

In any case you will hear from me again in the course of the next few days. (いずれにしても、二、三日中に再び君に報告する予定でいる) 172頁

漢訳の3種類が扱ったのは、初出雑誌ではなく、単行本であることはすでに指摘している。にもかかわらず、『降妖記』と『癸崇』は、この箇所を翻訳していない。しかし、『怪癸案』は、違う。

【怪癸案】或遲日吾更有以告君。(また後ほど君に報告するよ) 86頁

ちいさな箇所だ。だが、ちいさなところをゆるがせにするかしないかが重要だ、と私は考えている。3種類の漢訳を評価するとき、原文に忠実であるかどうかを基準にする。今はまだ検討して途中ではあるが、『怪癡案』がほかの2種類に比較して上質な翻訳だということができる。

第10章 ワトスン先生の日記から EXTRACT FROM THE DIARY OF DR. WATSON.

前2章は、ホームズにあてたワトスンの手紙だった。本章は、趣向をかえてワトスンの10月16日付および10月17日付日記である。

『降妖記』だけが、「九月十一日」(68頁)と「九月十七日」(73頁)に誤る。その理由がわからない。誤訳するような箇所ではないからだ。旧曆に換算したつもりなのだろうか。そもそも、その必要があるのか、はなはだ疑問でもある。

16日の日記で明らかにされる事柄は、主としてふたつある。

ひとつは、バリモアの義弟である脱獄囚が南アメリカへ逃亡する手はずになっていること。もうひとつは、チャールズが殺された時、L.L.という女性に会うことになっていたという新事実だ。

脱獄囚についていうと、殺人事件の本筋には直接からむようには見えないかもしれない。そう見るとすれば、ドイルの筆がさえていることになる。関係がなさそうので、結局は、本筋に密着して配置されている。だから、翻訳に手を抜けば、物語そのものが貧弱になる。バリモアたちも、バスカヴィル館の荒涼とした雰囲気を作り出すためにも、必要な存在なのだ。それは、漢訳者たちも理解している。だから、省略することはない。

それは、いいのだが、なぜだかこれも『降妖記』だけが、原文の南アメリカ South America をただの「アメリカ(美洲)」(70頁)にする。不注意なのだろうか。訳者がそうであっても、商務印書館には編訳所が設置されているのだから、その関係者は訳文を点検しなかったのかと疑問に思う。その回答は、点検はしなかった、である。矛盾は1916年の商務印書館編訳所を回想して、編訳所には校閲担当者がいなかったとのべている。なにもわざわざ誤訳を指摘してうらまれることもない、という考えがあったというのだ*63。読者のことは眼中になかったということになる。相当にいいかげんだ。

本章の後半は、10月17日付日記である。

L.L.という名前は、ローラ・ライオンズ Laura Lyons であることが判明する。
ムアに潜むもうひとりの不審者が誰なのか。興味をつないで次章にうつる。

第11章 岩山の男 THE MAN ON THE TOR.

ワトスンの日記が10月17日で終わったから、本章は翌日の18日からのことになる。
『降妖記』だけが、「九月十八日」にして違う月を示す。

ワトスンが、ローラ・ライオンズ夫人を訪問するばめんを比較対照してみよう。

A maid showed me in without ceremony, and as I entered the sitting-room a lady, who was sitting before a Remington typewriter, sprang up with a pleasant smile of welcome. (メイドが無造作に案内してくれた。居間に通ると、レミントン社製のタイプライターに向かって座っていた女性が、愛想の良い笑みを浮かべながら、さっと立ち上がった) 191頁

ローラ・ライオンズ夫人は、来客が親しい男性であると予想していたことが、この表現から読みとれる。その男性とは、ここでは明らかにされていないが、ステイブルトンなのだ。

【降妖記】一女僕延余入。見一婦人坐字儿側。欣然起立。似迎熟客者。(メイドが私を招き入れると、テーブルに座っていた婦人が、よろこんで立ち上がり、まるでなじみの客をむかえるようだった) 75頁

レミントン社製のタイプライタは、漢訳されていない。それを除けば、雰囲気は出ている。

【怪癡案】一女傭出応入。見羅娃在廳事中打字。聞客至。輟而起迎。(メイドが迎え入れると、ローラが広間でタイプライタを打っているのが見えた。客がきたのを知って、むかえに立ち上がった) 94頁

『怪癡案』は、『降妖記』と同じ年に発行された。一方はタイプライタを知らず、

『怪癡案』はほぼ正しく漢訳している。

タイプライタといえば、「娘を欺く義父事件（継父誑女破案）」（『時務報』第24-26冊 光緒二十三年三月二十一日1897.4.22 - 四月二十一日5.12。「花婿失踪事件」）に出てきた。その時は、タイプライタという単語そのものが漢訳されなかった事実を思い出す。時間が経過すれば、適正な訳語が使用されるという例のひとつだといえようか。漢訳者による、ということはいうまでもないが。

ただし、知人であると勘違いした箇所は、漢訳に反映されていない。

『癡崇』は『降妖記』を後追いしている、と表現してきた。ところが、まったくの「後追い」というわけではない。

【癡崇】一女僕肅余入室。見一婦人。坐一打字機側。睹余至。即起立通款。（メイドが私を部屋に迎え入れると、婦人がひとりタイプライタのそばに座っているのが見えた。私が来たのを見て、すぐさま立ち上がって出迎えた）98頁

タイプライタの漢訳は正確だ。ただし、ここでも知人と思い違いしたところは、翻訳しきれていない。

ワトスンがローラ・ライオンズ夫人から聞いたことは、それほど実り多いものではなかった。チャールズが殺された夜、ローラは会う約束をしたが行かなかったことなどを確認しただけだ。

ムアの不審者、すなわち章題の「岩山の男」については、意外な展開になる。ワトスンは、あやしい人物だと見定めてその正体をさぐっている。少年が食料を運んでいる現場を目撃し、その場所に足を踏み入れてみると、外から聞き慣れた声がする。

第12章 岩山の死*64 DEATH ON THE MOOR.

ホームズが再登場する。

ワトスンは、自分の方が不審者を追っているとばかり考えていた。だが、その不審者、実は、ホームズの監視のもとにあった。こういう逆転が読者の興味をひっぱっている。

本章から、物語は急展開を見せる。

ホームズの口から、つぎのことがワトスンに明らかにされる。

ステイブルトンの妹は、妹ではなく妻であること、ロンドンでホームズたちをつけ回していたのはステイブルトン自身だったこと、彼とローラ・ライオンズ夫人がごく親しい仲であることなどだ。極めつけは、彼のねらいはヘンリーを殺害することだった。

Holmes's voice sank as he answered:

“ It is murder, Watson refined, cold-blooded, deliberate murder. Do not ask me for particulars. My nets are closing upon him, even as his are upon Sir Henry, and with your help he is already almost at my mercy. (ホームズは声を潜めて答えた。「殺人だよ、ワトスン。巧みに仕組まれた、残忍きわまりない殺人計画だ。細かな点は話せない。彼の仕掛けた網がサー・ヘンリーを捕らえようとしているが、ぼくの網もステイブルトンに着実に迫っている。君の助けで、彼はぼくの手の中に入ったも同然だよ) 218頁

ホームズは、事件全体をすでに把握している。ワトスンへの説明は、まだ、する段階ではないという判断だ。

【降妖記】福沈声曰。是必就人人之所疑者。以行其毒殺之計。斯太白敦所布置。已為爾我覷破。當難倖脱。(ホームズは声をひそめていった。「それは、人々が疑っていることで、毒殺をやろうとしているんだ。ステイブルトンの計画は、ぼくだけが見破っている。のがれるのはむづかしいんだ) 86頁

「毒殺」という箇所が、ひっかかる。訳者は、本当にそう考えているのだろうか。原文の murder をわざわざそう漢訳する必要があるのか、疑う。さらには、本書の題名が「バスカヴィル家の犬」であることに、無頓着であるといわなければならない。「毒殺」であるならば、バスカヴィル一族は、魔犬に呪われているという前提で物語が進行しているのを無視する結果になるからだ。

【怪癡案】施低声曰。彼之詭秘毒手段。君今姑勿問其詳。吾已張網羅以困之。更得君助。則彼必無可遁。(シャーロックは声を潜めていった。「彼の秘密の残忍な手段は、君はその詳細を聞かないでくれ。ぼくはすでに網をはって包囲

している。君の助けで、彼は逃れることはできないよ) 107-108頁

ここまで漢訳しているのだから、こちらは英文原作をほぼ完全に把握している、
といってもいいだろう。『降妖記』に比較すれば、上出来だ。

【葵崇】福低声答曰。昧盡天良。実行其暗殺主義耳。雖然彼之所凶。已盡為我
覷破。余網已張。彼陷落之時非遙矣。(ホームズは声を潜めて答えた。「良心
をなくし、暗殺主義を実行するのだ。彼の計画は、ぼくが見破っているがね。
ぼくの網はすでにはってあって、彼が落ちるのはそう遠くではないよ) 111頁

「暗殺主義」は、原文にはない。漢訳のしすぎだと思う。だが、『降妖記』より
は、まだ、マシだ。

叫び声がして、ヘンリーの衣服を身につけた人物が殺されている。ヘンリーが殺
されたとばかりに思ったが、実は、脱獄囚であった。ここで、ヘンリーがホテルで
ブーツを盗まれた理由がわかる。ヘンリーのにおいが必要だったのだ。

この物語が特異なのは、犯人がステイブルトンだとすでにわかっていることだ。
犯人は判明しているが、その証拠を出すことができない。いわゆるアリバイ崩しの
興味につながる。

本章には、重要な事柄が示されていることをいっておこう。

ホームズが重視するのは、犯人であることを証明する動かぬ証拠を提出すること
だ。つまり、いわば証拠主義に立脚している点を見逃すことはできない。捕縛した
としても、犯人であることを証明しなければならない。現代の読者にとっては、説
明の必要もない明白な前提である。これを、当時の中国の読者は、どのように受け
取ったのか。漢訳者は、読者を代表していると考えから、該当箇所を見てみよう。
英文原作の関連箇所ふたつを示す。いずれもホームズの発言だ。

But supposing, for argument's sake, that we had him arrested to-night, what on
earth the better off should we be for that? We could prove nothing against him.
(けれども、ためしに仮定してみたまえ。ぼくたちは今晚にだって彼を捕縛で
きるよ。けれどもそれで、ぼくたちのために何かいいことがあるだろうか? 彼
を有罪にするような証拠が、ぼくたちにはないのだ) 231頁

We should be laughed out of court if we came with such a story and such evidence. (この程度の話と証拠では、法廷で一笑に付されるのが落ちだよ)
231頁

【降妖記】設竟捕之。子以何據控告其罪。(捕縛したとして、きみはなんの証拠でその罪を告発するのかね) 90頁

欲控告人。須証其罪。不能徒恃捕風捉影之聞見。若子以獵犬作祟之說。訴之法廷。將貽為笑柄。(告発するにはその罪を証明しなければならない。あてにならない伝聞によるわけにはいかないよ。獵犬の祟りだという伝説で法廷に訴えたとしたら物笑いになる) 91頁

英文原作そのままではないにしても、証拠の必要性を強調する漢訳である。

【怪癩案】今遽擒之。將何以証其罪。(今、あわてて彼を捕縛しても、その罪を何で証拠だてるのかね) 114頁

焉能為証。若至公庭。豈不令人嗤笑乎。(証拠とすることはできないよ。もし法廷にだしても、笑われるのが落ちだね) 114頁

簡潔にすぎるかと思いきもするが、原文の意味するところは十分に翻訳している。

【癩崇】証拠不充足。為時尚早。(証拠不十分だよ。時期尚早だね) 116頁

法廷うんぬんの箇所は、省略してしまった。大幅な簡略化によってページ数を減らす必要があったらしい。

3種類の漢訳は、程度の差はあるにしても、原作で述べられた証拠主義を基本的に無視していないことを確認しておきたい。証拠がなければ有罪にできない。これが探偵小説の大前提として存在している。漢訳者にも認識されているのが重要なのだ。

第13章 綱を張る FIXING THE NETS.

物語は、真相解明にいたる直前の段階にある。ステイブルトンを捕縛するための

段取りを整えるのだ。

まず、ステイブルトンがバスカヴィル族の一員であることがホームズによって指摘される。先祖の肖像画と酷似していることが証拠だ。財産が目的である。

ステイブルトンが捕虫網を使っているのに引っかけて、ホームズは、つぎのようにいう。

We have him, Watson, we have him, and I dare swear that before to-morrow night he will be fluttering in our net as helpless as one of his own butterflies. A pin, a cork, and a card, and we add him to the Baker Street collection! (これで、彼はぼくたちの手の中に入った、ワトスン。彼をつかまえたも同然だ。明日の夜までに、彼が捕まえる蝶のように、彼を網の中にとり込んでみせる。これは確実だよ。虫ピン、コルク、カードを用意し、ぼくたちのベイカー街コレクションに加えようではないか!) 239-240頁

【降妖記】然。明日薄暮。彼入余網中。猶彼之以網捕蝶。而余偵探記中。又増一巴斯赤衛利獵犬戕人之案。(そうだ。明日の夕方には、彼はぼくの網の中だ。彼が網で蝶をつかまえるようにね。ぼくの探偵記録のなかに、バスカヴィルの獵犬殺人事件が増える) 94頁

漢訳者は、原文の「ベイカー街コレクション」を探偵記録に読み替えた。まったくの間違いというわけではないが、おさまりが悪い。漢訳のようにしてしまうと、ホームズ自身が事件の記録をつけてるようにも理解できるからだ。記録は、ワトスンの担当である。

【怪癡案】屈臣彼已在吾等掌中矣。明日彼必困吾之網中。亦如蝶入彼之網也。(ワトスン、彼はすでにぼくたちの掌中にあるよ。明日、彼はぼくの網の中につかまるはずだ。まるで蝶が彼の網に入るようにね) 118頁

ベイカー街コレクションは、無視してしまった。

【癡崇】余知明日下午。斯太白頓將不知不覺陷入於余輩所張之羅網矣。(明日

の午後、ステイプルトンは知らず知らずにぼくらがはった網に入り込むだろうよ) 118頁

こちらも『怪癡案』と同様にあっさりと切り上げた。これでは、ホームズのすこし高揚した気分が、うかがえない。

翌朝、ホームズは、ヘンリーにひとりでステイプルトンを訪問するようにいう。

ホームズたちは、ライオンズ夫人に面会し、ステイプルトンが妻を妹といつわっていたことを知らせる。夫人は、結婚を餌に騙されてチャールズに面会の手紙を書いたのである。つまり、知らないうちにチャールズ殺しの手伝いをさせられていたというわけだ。

ホームズが事件について、ふと、漏らしたことばがある。

I shall soon be in the position of being able to put into a single connected narrative one of the most singular and sensational crimes of modern times. Students of criminology will remember the analogous incidents in Godno, in Little Russia, in the year '66, and of course there are the Anderson murders in North Carolina, but this case possesses some features which are entirely its own.

Even now we have no clear case against this very wily man. But I shall be very much surprised if it is not clear enough before we go to bed this night. (現在の犯罪の中でも一、二を争うほど特異で、センセーショナルな犯罪について、ぼくはまもなく、ひとつの話としてまとめて話せるようになるよ。将来、犯罪学の研究者なら小ロシアのグロドゥノで一八六六年におきた事件を思いおこすことになるだろうね。それから確か、ノース・カロライナ州のアンダースン殺人事件もだ。いずれにしても、今回の事件は比べるものがない、特殊な事件だよ。今になってもまだ、あの狡猾きわまりないあの男の犯罪は立証できないのだ。とにかく、今夜、寝る前までに、すべてが解き明かされていないはずはないさ) 249頁

出てくる地名も、1866年という年も、事件名も、かかわっている目下の事件とは、直接の関係はない。ホームズが直面している事件がいかに特異であることを強調するための説明にすぎない。だからといって、これを省略してしまうと、ホームズ物語

としての豊かさ、別のことばでいえばホームズの生活史が失われてしまう。くりかえして私がいう理由である。

【降妖記】功垂成矣。此案最奇者。為其始枝節岐出。檢之如治禁絲。迄今則不難組織為一幅錦繡。世界中喜読探案者。茶餘酒後。又増一驚詫摹想之書。念当日膺斯事之人。亦歎美之。但控告斯太白敦仍無所據。今夜如不能了。則前功盡棄已。(もうすぐ成功するよ。この事件がもっとも奇怪なのは、はじめは枝葉がでてきたが、乱れた糸を整理するように点検して、今では錦織刺繡を織り上げるのもむつかしくはなくなった。探偵物語を読むのが好きな世界中の人々には、ひまつぶしに、驚きの書物がまたひとつ増えることだろう。この事件にあたった人も、賛美するよ。しかし、ステイブルトンを告訴しても証拠がない。今夜、終わることができなくは、今までの苦労は水泡に帰すね) 99頁

グロドゥノもアンダースン殺人事件もないのは、漢訳者の判断だろう。そこを除けば、大筋はほぼ原文通りの翻訳だといってもいい。

【怪癡案】此案吾已盡得其底蘊矣。少間案破。君誌之。則又得邇來一空前奇案以餉世矣。凡攷究謀害案者。莫不以一八六六年郝麓蘆 Grodno 及燕德詢 Anderson 二案為奇絶。詎知此案更有甚于彼。(この事件について、ぼくはすでに詳細は全部を把握しているよ。もうすこしで解決だ。きみが記録すれば、ちかごろ空前の奇怪事件ということになる。1866年グロドゥノおよびアンダースンのふたつの事件よりもすごい。この事件は、それらとの比較にならんよ) 123頁

固有名詞に原文を添えるのが、『怪癡案』の漢訳者のやり方だ。省略していないところを見てほしい。

【癡崇】以意度之。此案今晚當破。明日余輩二人。可釈重負。買醉於倫敦酒家矣。(この事件は今晚には解決すると考えている。明日にはぼくたちは重荷を下ろして、ロンドンのパブで酒をのむことができるよ) 122-123頁

事件の奇怪さはなくなってしまった。後半は、漢訳者の考えによるつけたしだ。

しかし、「重荷を下ろして」という表現を使えば、ホームズは普通の人になってしまう。事件がないことの方が、彼には苦痛であることを漢訳者は知らない。事件がこみいつているだけ、ホームズには喜びなのだ。それを知らずに、翻訳をしていることが、この少しの付け加えからわかってしまう。

3種類をならべると、やはり『怪癡案』に軍配があがる。

第14章 バスカヴィル家の犬 THE HOUND OF THE BASKERVILLES.

レストレイドを加えてホームズとワトソンの3人は、ステイブルトンの屋敷に潜入した。ヘンリーが食事を終えて帰宅の途につく。霧のなかで彼を待ち伏せたホームズたちの前に、魔犬が出現した。

A hound it was, an enormous coal-black hound, but not such a hound as mortal eyes have ever seen. Fire burst from its open mouth, its eyes glowed with a smouldering glare, its muzzle and hackles and dewlap were outlined in flickering flame. (それは、漆黒の巨大な獵犬であった。犬には違いないが、見たこともないものだ。大きく開いた口から火をふき、ほのかに炎を宿す目はぎらぎらと睨みつけ、その鼻、逆立つ首の毛、のど袋、そしてその全体が小さな火を放っているのだ) 258-259頁

【降妖記】一大黒犬。衝突而來。張齒流目。光耀如火。項皮背毛。灼灼射人。
(巨大な黒犬が突進してきた。歯をむき出しにして目をおよがせ、炎のように輝かせている。首の皮、背中の毛はきらきらと人を射ている) 101頁

4字をくりかえして調子がいい。だが、その分、上滑りだ。英文原作に出現する巨大な獵犬が、口から火を吹いているのは、たとえではない。文字通り火をふき、身体全体が小さな火を放っている。だからこそ、レストレイドは悲鳴をあげた。その恐怖感が、『降妖記』の漢訳では伝わってこない。

【怪癡案】見一龐然黒獸。衝霧而出。狀類癡屬。但其目光掣電。鼻息噴火。
(巨大な黒い獸が、霧のなかから出てきた。形は獵犬だが、その目はひかり、鼻息は火をふいている) 127頁

獵犬が全身から火を放っている凄味が、こちらにもすこし足りない。

【燧崇】見一猛厲之黒色大獵犬。疾趨而前。(獰猛な黒い巨大な獵犬が、すごい速度でやってきた) 125頁

ますます簡潔になってしまった。怖さも迫力も、ない。

残念ながら、3種類の漢訳は、ともに恐怖感を伝えてその程度が低いといわざるをえないだろう。

獵犬が実際に火を放った原因を説明した箇所を紹介しておこう。これをあわせて読めば、漢訳者がどのように原文を把握していたか理解できると思うからだ。

Even now in the stillness of death, the huge jaws seemed to be dripping with a bluish flame and the small, deep-set, cruel eyes were ringed with fire. I placed my hand upon the glowing muzzle, and as I held them up my own fingers smouldered and gleamed in the darkness.

"Phosphorus," I said. (死んでおとなしくなっている今でも、巨大な犬の口からは、青白い炎がこぼれていて、深く窪んだ、残虐そうな小さな目も、まるく火で囲まれていた。その燃えている鼻先に手を置き、次に指をかざすと、わたしの指が暗闇に鈍く光を放った。/「燐だ」と、わたしは言った) 263頁

【降妖記】雖受槍擊。目与齒。仍紅赤如前。余以手納犬口内。出之。則指甲燦然有光。余曰。此犬必多食燐質。故能發光。(ピストルに撃たれたとはいえ、目と齒はやはり真っ赤だ。わたしは手を犬の口にいれて出すと、指は鮮やかに光る。「この犬は、燐を食べたにちがいない。だから光ることができるのだ」とわたしは言った) 102頁

リンが鈍く光っている描写ではない。漢訳から受ける印象は、巨大な犬が燃え上がっているかのようだ。すこし訳しすぎではなからうか。

【怪燧案】今雖死而目鼻尚有光。吾試捫之。指忽生光。因言施曰。咦。有燐質

乎。(死んでも鼻はまだ光っている。わたしが触ってみると、指が光った。
「ああ、燐だな」とシャーロックが言った) 128頁

ワトソンのせりふ「燐だ」をホームズに言わせてしまった。それを除けば、簡単な表現になったぶん、ぼんやりとしたリンの光という感じが出ている。

【燐崇】なし

『燐崇』は、省略したから、前の箇所とあわせて、魔犬は光を放っていない。これでは、ただの獯猛な獵犬になる。伝説の魔犬という雰囲気では、まったくない。

ステイブルトン夫人は、自宅で縛られているのが発見された。犯人のステイブルトンは、沼地に逃亡してそのまま飲み込まれたということになった。

ホームズものでは、犯人との立ち回りがあって逮捕に終わることがよくある。ただし、本件は、犯人は底なし沼に落ちて死亡したのだろう、とあいまいに終了する。

第15章 回想 A RETROSPECTION.

ホームズがワトソンに事件の全貌を説明する。まとめの章である。

単行本化にさいして、アップウッド大佐 Colonel Upwood の事件とカレール嬢 Mlle. Carere 殺害事件のふたつが冒頭に書き加えられたのは周知のことであろう。

ヘンリーとモーティマー医師が、神経を癒すための長旅に出る途中、ロンドンのホームズたちを訪問する。たんなるあいさつだ。その夜、自然とバスカヴィルの事件がホームズとワトソンの話題にのぼった。これが原作である。

ところが、『降妖記』は、それらを大胆に書き換える。アップウッド大佐もカレール嬢も省略。ヘンリーたちがやってきたので、彼らを接待した。さらに、その場でバスカヴィルの事件を解説するようワトソンがたのむと、ヘンリーたちもそれに賛同するのだ。漢訳を下に示すが、ある意味で「独創的」なのだ。

【降妖記】十一月下旬某日。亨利及層母提耳以遊歷過倫敦。福宴之於家。賓主歡甚。飲酒數巡。余請福剖析此案關鍵。亨利層母提耳亦固請之。福曰子試檢余日記視之。便可了了。余曰。不若口述之詳明。子何吝喉舌如是。福曰。口述恐不連貫。而乘機應變者。尤易遺忘。(11月下旬のある日、ヘンリーとモーティ

マーは旅行でロンドンにきた。ホームズは、家に招待した。主客ともに喜び、酒が数回まわったのだ。わたしはホームズにこの事件の鍵を分析してくれるようにたのんでみた。ヘンリーとモーティマーももとよりそれを望んでいる。「ぼくの日記を見てみれば、理解できるよ」とホームズはいう。わたしは、「話してもらったほうが詳しくてわかりやすいよ。どうしてそんなに惜しむのかね」というと、ホームズは、「話すとおそらく一貫せずに、時におうじて変化するし、忘れやすいものなんだ」と答える) 105頁

ご覧になれば、読者はすでにおわかりだろうが、ホームズらしくないところが「独創的」だ。

ホームズが日記をつけていたという箇所を見られたい。備忘録とかスクラップブック、手帳は聞いたことがあるが、それらに日記が含まれているのだろうか。ありそうで、違う。

口頭での説明は、書き物に劣るという判断をホームズがしているのも、珍しい。つまり、ここでは漢訳者が勝手に想像したホームズ像を提出していると思われる。勝手な想像だから、漢訳者自身の考えが無意識に反映されて出てきたホームズ像なのだ。頭脳明晰なホームズが、事件の詳細を説明して、時に応じて変化するとは考えられない。

そもそも、英文原作には、日記などでてこないし、ホームズによる口頭での説明が、当然のようにしてはじまるのである。「あの魔犬の話も、なるべく記憶が遠のかないうちに、できるだけ正確になりゆきを君に話しておこう。So far as the case of the Hound goes, however, I will give you the course of events as nearly as I can,」(276頁)

第15章全体が、ほとんどホームズの語りで構成されている事実を見れば、『降妖記』のように口頭での説明を軽んじるホームズなど存在する余地がない。漢訳者は、勘違いしたといわなければならないだろう。

『怪癡案』が英文原作に忠実に漢訳しているのは、いうまでもない。

一方で、『降妖記』を後追いする『癡崇』は、まぎれもなく『降妖記』を参照している。『降妖記』が酒をふるまっているのを、「ホームズはひきとめて食事をもにした。(福留之共飯)」(127頁)と書き換えて、さらに省略を加えている。

『怪癡案』の末尾に訳者の「序」がある。その内容は、原作者コナン・ドイルの

解説だ。今まで紹介されたことはない。資料として原文を掲げる。発行された1905年という早い時期に、すでに正確な著者説明がなされていることに注目されたい。ただし、これに言及した文章をみたことがないところから、当時、漢訳そのものがそれほど流布しなかったのかと思う。周桂笙が読んでいれば、シャーロック・ホームズを実在の人間だと考えることはなかったはずだ。

右記癸一書為韓璫^{ママ}Conon Doyle所作。韓乃英倫當世之大文豪也。年甫壯歲。而平居著作。言盈百萬。曾以文譽膺列爵之賞。由是大名鼎鼎。震于寰宇。比年疾當道之懜懜。偵探之昏昏。坐令狡獪之徒。作奸犯科。而莫能察。故託屈臣之名。而作施樂盒偵探案。以狀當時上下社会之情形。且意謂倘得一人如施樂盒者。則奸宄不作。若猶不靖。亦斷無苟免之理。噫。以世称文明之英国。尚且如此。吾国更如何也。余有慨于斯。爰泚筆記之。甲辰臘八日成城子識于大我堂

結論としては、漢訳の質からいって、まず『怪癸案』が上位にくる。優秀である。すこし水準がさがって『降妖記』および『癸崇』という順番だ。 罍

【注】

59) 巻末に訳者の序がある。それには「甲辰臘八日成城子識於大我堂」と記される。

成城子は、蔡守か。未確認。「序」の全文は、本文を見られたい。

60) 陳霆銳(1890-1976)は、江蘇吳県(今の蘇州)の人。中華書局で編集者をしていった。1920年、蘇州の東吳大学を卒業したのち、アメリカに留学、法学博士を取得。1923年、帰国後、各大学の教授を歴任した。1948年、台湾に渡り弁護士となる。1954年、東吳法学学院院長。1956年、アメリカに移住。1974年、台湾にもどった。以上、陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』(杭州・浙江古籍出版社1993.5. 534頁)による。経歴を見ると、中華書局に勤務したのちに大学に入学している。ホームズものの漢訳は、陳霆銳が大学に入学したころに行なったものらしい。アメリカに留学する以前の仕事だ。

61) 私の手元にあるのは、刊年不記の「小説彙刊第六十四種」である。

62) 侗生「小説叢話」阿英編『晚清文学叢鈔』小説戯曲研究巻 北京・中華書局19

- 60.3上海第1次印刷。台湾・文豊出版公司(1989.4)の影印本がある。454頁
- 63)茅盾「商務印書館編訳所和革新《小説月報》的前後」『商務印書館九十年
我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1。151頁
- 64)「ムアでの死」というのが章題だろうが、日本語訳(210頁)ではこうなっている。

(たるもと てるお)

『清末小説から』第76号 2005.1.1

- 「天方夜譚」小考樽本照雄
1909年發表的一篇“狂人日記”
.....范 伯羣
【資料】催醒術冷
晚清小説作者掃描(壱).....武 禔
百年是非,如何評説?1.....歐陽縈雪
録吳趸人《端陽新樂府》.....武 禔

『清末小説から』第77号 2005.4.1

- 漢訳八ガード小考樽本照雄
鄭富灼及其編纂的商務印書館
英語教科書張 英
『新小説』の発行遅延.....杜 筆恩
百年是非,如何評説?2.....歐陽縈雪
晚清小説作者掃描(貳).....武 禔
漢訳アラビアン・ナイト(11)
.....樽本照雄

<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

『清末小説から』は、清末小説研究会のウェブサイトのみの公開です